

# 地域の人々の健康を支え、 安心できる医療を届けたい。



笹川 恵美

EMI SASAKAWA

赴任地

 **ボリビア**

赴任地での職種(活動分野)  
**診療放射線技師**

和歌山県橋本市

**医療法人南労会紀和病院 診療放射線技師**

放射線技師専門学校を卒業後、技師として関西圏の病院に入職。  
ヘアドネーションをきっかけに、誰かのために行動することは難しくないと気づき、  
自分の技術を活かして海外で働くことは可能かを視野に入れて検討するうち  
JICAの活動と要請内容を知る。現職派遣制度を利用して、赴任地へ。

## 自分と職場のレベルアップを図ることで、患者様に最善の医療を。

和歌山県橋本市、この地域の中核病院として地元の信頼を集める紀和病院に、笹川さんは勤める。診療放射線技師として、通常のレントゲン撮影のほか、マンモグラフィ、CT、MRIなどの機器を扱い撮影を行う忙しい毎日だ。

笹川さんがJICA海外協力隊への応募を決めた時、紀和病院に現職派遣制度はなかった。上司に相談したところ、見知らぬ環境で医療貢献を図ろうとする笹川さんを応援してくれ、すぐに制度を整えて

くれた。活動を終えて帰国した現在も、ボリビアでの経験を院内にレポートしてほしいと院長から依頼されるなど温かく迎えてくれている。

ボリビアでは、教職に近い役割を担ったが、学ぶことも多かった。今後さらに自分磨きを忘れず、安全面に気を付け、医師の指示を受けて適切な放射線検査を行っていきたい。そのためにも、日々自身の専門技術の向上に向けて勉強時間を増やすなど、できることから一つずつ実践している。

## 言葉のほか、学校や生徒について、 まずは自分が学ぶ側に立つ。

笹川さんが赴任したのはボリビアの医療系専門学校。レントゲン技師の養成クラスに配属され、生徒への指導と、教科書の見直しや新しい副教材づくりなどの支援を行った。生徒は高校を卒業したばかりの若者から、40歳近い中年層までさまざま。全員が手に職をつけたいと熱心に学んでいた。当初、授業をスムーズに進行するには拙かったスペイン語は、大量の副教材づくりで鍛えられ、会話力も向上して、徐々に教える立場として信頼を得られるようになる。その後、「真面目な話だけでなく、昼食時に冗談を言って笑い合える関係になれてうれしかった」と笹川さんは言う。言葉が下手でも、分からないことだらけでも、悩みよりまずは進んだ結果だ。



語学研修中のホームステイ先



撮影実習



日系学校のお仕事教室

## 新型コロナから身を守る 手洗い講座を自主企画。

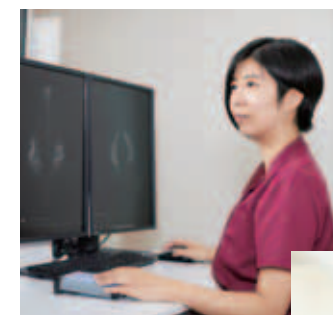
ボリビアの医療格差は大きく、貧しい人は病気になっても適切な治療を受けにくい。一般に手洗いの習慣がない彼らに新型コロナウイルスから身を守ってほしいと、笹川さんは帰国前に手洗いの正しい方法、大切さを説くポスターを制作。上司に掲示場所を相談に行くと、とても関心を持ってもらい、急遽手洗い講座を実施することになる。手にウイルスと仮定した色を塗って、人と握手をすると相手の手に色(ウイルス)が移るなど実演を交え、石鹸を使って手を洗う重要性を説明した。ポスターを作って終わりではなく、現地の人と直接コミュニケーションを取りながらコロナ予防を実践できて、より「やってみて良かった」と思った。

(2021年1月に取材)



## 世界には、 多様な価値観があると知る。

世界の多様性を知ることができたとともに、自分がどこにいても自分の根本は変わらないと気づいた笹川さん。現地の人と違うことは当然で、同じ任地に滞在する他職種のJICA海外協力隊員もさまざまな考えを持っている。それぞれの考えやできる事が違うので、自分の尺度だけで考えてたどり着く先は必ずしも正解ではないと感じるようになった。元の職場に戻ってからも、以前より広い視野で周りを見られるようになり、ドクターや同僚、患者の意見や気持ちをくみながらコミュニケーションをとるようになった。また帰国後、日本はボリビアと比べてルールが多いと感じた。ルールにすべての判断を任せる日本人は考えることが少ないのではと危惧するようになった。



迅速に正確な情報を  
医師に渡すことを心がけている



## 患者様の負担や不利益を減らす、 自分にできることを始める。

いったん技師という医療現場の仕事から離れ、他人に教える立場になったことで、自分の撮影技術を客観的に振り返ることができたという笹川さん。より丁寧な質の高い検査を行えるようになったそうだ。笹川さんは今後、ボリビアでの指導経験を活かして、病院の後輩育成にも力を入れたいと考えている。誰が撮影しても、患者の負担が少なく、精度の高い画像を提供できるように、自分を含めた放射線技師のレベルアップを図るつもりだ。

また、ボリビアでは、現地の人が見たことも聞いたこともない医療機器を怖がる姿を見て、安心して検査を受けてもらう重要性を実感した。「日本でも、説明不足によって不安を抱えながら検査を受けている人がいないか心を配りたい」と笹川さんは努める。

上司に  
聞く!



医療法人 南労会 紀和病院  
診療技術副部長  
**國眼 勇**さん

仕事は迅速で、忙しい困っている場所に対して積極的に手伝いに行く笹川さん。帰国後、先輩や後輩の意見を聞く姿勢が向上したように感じます。昨今、海外労働者の雇用が増え、外国人の診療や健康診断も増加しています。彼らが日本の医療機関にかかる際には戸惑うことも多いと思うので、橋渡的な役割も担ってほしいです。

## JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 楽しい!に尽きる、やりがいのある2年。

一度だけの人生で後悔はどうしても残ると思いますが、誰かのために、誰かと共に頑張った経験は自分を支えてくれる力になります。現地の同僚のほか、さまざまな職種で活動するJICA海外協力隊のメンバーたちと知り合い、いろんな話を聞くことができたことも貴重な経験でした。